

二五八 猿橋騒動の結末を示す願書 明治四（一八七二）年

乍恐以書付御下奉願上候

当御庁下猿橋村年寄小前貳拾四人惣代年寄東五郎外老人、并枝郷小倉幡野両組年寄小前四拾九人々、同村名主兵右衛門外貳人々相懸不正出入、去ル文久二戌六月中内海多次郎様御役所へ奉出訴候一件、追々引続御吟味奉請罷在候処、今般内済仕候趣意左ニ奉申上候。

一、訴訟方にて申立候は、当村之儀御高貳百四十六石余、宿並家数九七拾軒余、其外枝郷小倉幡野共一手差配地宿兼帯之村方ニ有之、然ル処相手兵右衛門儀去ル天保四巳年入役いたし、同人勤役以来地宿取斗向私欲横領而已多、且組頭九左衛門儀兵右衛門第にて年寄ニ有之候処、兵右衛門手代と名附、時々役席え携役、權を好候間、役儀為勤候へハ穩ニ可相成と存、去酉正月役入為致候処、都て兄弟馴合ニ付非道之取斗追々増長いたし、小前難決仕詰、捨置候得は終に可及亡村は厩然ニ付、無余儀右不正之儀々乍恐左ニ箇条を以御訴訟奉申上候。

一、拾三ヶ年以前戌年中、当宿字猿橋懸替御普請被 仰付、仕立方之儀御普請役様方御附添宿方請負ニ被 仰付、右御普請中宿方惣代世話方として其節年寄にて相手九左衛門六人之もの立会、同九月々村内人足日々罷出、亥四月中皆出来相成、然ル処右御普請御入用金御下并遣払共兵右衛門一手取斗いたし、半途迄へ村人足え手当いたし候得共、大半無手当にて遣払、尤御入用高三分通も其節御下金無之間、追て皆御下金有之次第仕揚勘定いたし惣小前え割渡可申旨兵右衛門儀申聞、御普請中九八ヶ月之間日々人足遣払に今御下金無趣にて拾ヶ年来其儘差置、且右御普請中隣村々々百石五拾人助合人足為差出遣払、先前々弁當代相払候仕来にて右戌年連も人足手当可遣管之処、是亦無沙汰ニ罷在候也。依ては已来右橋御普請昔之前同様触当人足助合差出方難決之<sup>(ト)</sup>間候儀ニ御座候間旁以難捨置、御普請勘定突詰夫々割渡可申旨、追々及催促候処今以老ト逸御下金無之杯体能申居、当節ニ相成候ては兵右衛門存寄次第之儀ニ付勘定為見届候儀難相成旨高声手荒之談有之候得共、右御普請御入用御下知高にて損金相立候節は、宿方一統え引請弁金可致管連印いたし候程之儀、清算可致は当然之儀、別て数日之間村方掛り切御普請手伝人足相勤候儀第一厚御仁惠ニ下置候御手当金遣い道不明之段歎々數奉存候間、御吟味被成下度段申立候。

一、相手方差上候は、去ル拾ヶ年巳前戌年中、当宿字大猿橋懸替御普請地元受負ニ被仰付仕立中、村方人足掛り切ニ罷出居候処、半途迄は人足賃銀相渡候得共、右御普請御下金兵右衛門一手取斗にて村人足えは無手当にて遣払候旨申立候得共、右御普請仕立方之儀は御普請役様御附添御嚴重之儀にて、名主兵右衛門、其節之組頭才助、年寄源右衛門、同九左衛門、小前にては百姓甚右衛門、喜三郎、清次郎、六右衛門都合八人世話方ニ相立諸般取斗方いたし、夫々手当差遣不申候て無差支出人足可有之道理無之、然ルヲ村人足ニ限御普請半途ハ無手当杯其外御入用高三分通御下金無之候間、追て皆下金有之次第仕揚勘定いたし可割渡旨申聞候杯、案外之儀にて、全体去ル亥年御普請皆出来之節諸向清勘定可取掛場合、道中日<sup>(ト)</sup>総御改御出役被為在御座、地役人共手廻兼、無損差延罷在、

二五八 知見芳文家文書六  
二（猿橋町幡野）

文久二（一八六二）年から十八年間にわたり争われた猿橋宿の村方騒動は、この史料にみるように、明治四（一八七二）年十二月、内済を以て落着いた。ここには幕末期にもっていた諸矛盾が集中的にあらわれており、しかもそれが文久二（一八六二）年六月の出訴以来明治までできたことは、その間同様の問題が存在しつづけたことになる。村内民主化を以て終了している点にも注目していただきたい（なお文中の千支の起点は文久二（一八六二）年であることに注意されたい）。

猿橋懸替費用・人足問題  
（嘉永三（一八五〇）年）

隣村へ助合人足さし出させ

相手方答弁

其上右御普請世話方之内病氣其外差支之もの有之、為突合清勘定自然後れ候儀にて、且亦隣村々々百石五拾人助合人足え先々々弁当代相渡候仕来之申立候得共、右は御支配御役所々近村々々高役人足御触当被成下候儀ニ付、先規橋掛替振合ニも弁当代等差出候儀曾て無之、全訴訟人共能書筋り候迄之儀ニ有之、一鉢右橋御入用御手当御下ヶ金にてハ諸色高直御普請仕揚遣私ニ引足兼、諸勘定突詰候節ハ足し金相立候儀を兼て世話方之もの共えも申聞、兵右衛門々ハ勘定清算之儀、是迄度々及談候得共前奉申上候通世話方之もの病氣其外為突合区々にて決算相後候儀之処、勘定突詰之儀催促および候連、兵衛門高声手荒之談事有之杯無跡形偽り書綴申上候得共、勘定合之儀は素々兵右衛門一己之取斗ニ無之候間、早々突合決算いたし、巨細為見届候様可仕候間、彼等偽り申懸候始末、御吟味被成下度段申立候。

事故で清算がおくれただけ  
弁当代は出さない

一、訴訟方にて申立候は、九ヶ年以前寅年中当村御高札懸所朽腐候ニ付、建替普請いたし候趣一統え相触、入用として金廿五兩と寛小前高割いたし、同年二納御年貢と一同之取立、翌卯之年当郡立野村下畑組平兵衛立林買取、伐木角取いたし郷中え人足触当為持え建置候処、翌辰年前書高札場礎いたし候得共、右木品之儀、兵右衛門自分造作向其外え追々遣い払ひ、御高札場今以敷石而已にて普請可致体ニ無之、年来御高札不懸置、乍恐勸善懲惡之御趣意を以て御取締御渡被下置候大切之御高札ヲ、既ニ九ヶ年来廢し置、前文申上候通普請金取立買入候用材之分自己之造作ニ相用、大胆押領之所行、御吟味被成下度段申立候。

高札場改築問題(安政元年)

(一八五四年)

一、相手方答上候は、当宿御高札懸所、年来相立朽腐候ニ付、寅年中建替入用小前一統と相談之上金式拾兩割付取立いたし、願人共申立之通木品買取、袖・木挽手間代、屋根板手間賃銀払、礎石工作料等夫々渡金いたし、材木屋根板等迄取運渡出来相成候事故、普請取懸り候心組にて其節当村ニ罷在候下谷坂本町大工吉五郎と申ものえ右普請渡方いたし、最早木口割振等いたし候折柄同人儀江戸表ハ親病氣之趣為知来立帰り候積を以出附いたし、其後同人出向方延引、其上壁根屋職人之内、上谷村用右衛門儀は既ニ手附金迄相渡置候処、去ル五ヶ年以前午年中病死旁御高札普請仕立方延引相成候儀ニ有之、然ル処右木品兵右衛門自分造作向其外え追々遣私普請可致体ニ無之杯取留儀申立候得共、右木品屋根板等迄聊散乱無之様置置候儀にて、兵右衛門方自用ニ遣私候儀決て無之、御見分被成下候ハ眼前可相分儀ニ御座候間、全申懸之次第御吟味奉願上度段答上。

相手方答弁

大工が江戸から来ている渡り職人であることに注意

屋根屋職人は上谷村の人

一、訴訟方にては、四ヶ年以前未年中、田畑川欠損地四拾石余奉願上御年貢御引方被仰付候由之処、小前方荒地引方不相互、第一未年格別之損地出来候儀無之、甚後暗き取斗ニ付、此段明細御吟味被成下度段訴上。

川欠損地問題(安政六年—一八五九年)

一、相手方答上候は、去ル未年七月中兩度前代稀之大風雨、当郡村々田畑山崩川

相手方答弁

欠石砂入等彫鋪、私共村方之儀兩度御支配様御見分奉請、御高三拾石式斗五升九合荒地相立候得共、爰作取入後之損地ニ付同年之儀は半高御年貢引方被仰付、翌申上去西同年之儀は荒地高皆御引方相成候ニ付、御年貢取立方之儀は御割付目録進小前銘々持高え割賦取立上納仕候儀にて、毛頭私欲不正之取斗仕候儀無之、然ルを訴訟人共申立候は、四拾石余損地奉願上御年貢御引方被仰候

安政六(一八五九)年七月大風雨

得共、小前方荒地引方不立第一未年格別之損地出来候儀ニ無之後暗き取斗いたし候杯申立候得共、村役人自己之取斗とは事変、御支配御役職ノ御出役御見分被為在候儀にて、全損地無之場所荒地ニ可相立様無御座、余り不法之論訴、此段御賢慮奉願上候、借亦未年荒地半高御引方御沙汰以前御年貢勘定仕揚相成引直し候ては夫々入狂出来候ニ付、其儘取立、尤半高御引相納候もの共えは御

引方割合相渡御年貢請取帳ニ相記、御年貢并諸入用等不納入之分は清算致ものも有之候得共、右は正御年貢不納辻見え候得は御引方之分にては引足不申詰り小前方ノ不納分相嵩候故願人共自分と等閑居今更体能御引方割渡し不仕候杯申立候段、甚以難得其意、前奉申上候進彼等同意之内ニも夫々御引方割渡請取候もの厩然有之、第一惣代之七郎左衛門等は多分は御年貢連年不納乍罷在、

右麻之儀惣代ニ相立候段不法之仕成と奉存候間、此段御賢慮被成下度願上候。且亦申酉兩年之儀は御引方御割附通小前持高え割付取立御上納仕候儀之処、是引方不立候段、兵右衛門私欲罷在候杯不容易儀申懸、同人身分ニ拘候儀ニ付、兩年取立押切帳御熟覽之上、御敵重御吟味被成下度段答上。

一、訴訟方申立候は、兵右衛門動役中御年貢取立方ニ付品々誚敷儀御座候間、割賦取立共巨細見届方被仰付度段申立。

一、相手方答上候は、御年貢取立方御割付御目録進小前銘々持高え割付取立上納仕候儀にて、其年々村内大小之百姓役宅と打寄都て取立巨細見届方為致候儀ニ付、彼是兵右衛門取斗向兼て心得乍罷在、意地悪敷所存ノ疑惑探り迄之儀ヲ以年来帳面為見届候ては際限無之、尤何之年何の賺ニ不正有之哉的証を以申立候上は、為見届候様可仕旨答上。

一、訴訟方申立候は、五ヶ年以前年年中暴瀉病流行いたし多人数相煩候ニ付、格別之以御仁惠翌年春中急夫食として御困切拝借被仰付、拾式俵御下ヶ相成趣、右之内五俵は当村枝郷小倉幡野え貸渡、残七俵分兵右衛門儀村内利助え売渡代金私欲いたし候而已ならず、剩右廻返納之儀、翌申二納御年貢え組込軒別錢六百三拾文ツツ取立押領至極之始末御吟味被成下度段訴上。

一、相手方答上候は去未春中御困切拾式俵拝借御下相成内、五俵は当村枝郷小倉幡野え貸渡、残七俵は宿内一同相談之上利助え代金五両にて売渡、右金利助え相預置銘々病災危難通候願果として氏神諏訪春日両社え職奉納いたし候手当ニ仕度申立ニ付、其節利助ノ預り金手形兵右衛門方え取置相預、右廻返納方之儀は宿内一統え割合買納仕候儀ニ有之、然ル処去ル申年中村内番人小屋焼失にて、跡小屋補理方入用差支、百姓孫七、清七、綱藏、縫左衛門ノ利助方え一札差入、追て小屋懸入用取立候上之間、右金之内式勿小屋入用に遣払候儀ニ有之、残て利助方え預ケ金三両之内にて取付運駄賃其外入用錢四貫八百文相賄罷在候儀にて、訴訟人共始一同及相談取斗置候儀を、今更兵右衛門私欲罷在候杯案外之申懸ケ、此段御吟味奉願上度段答上。

一、訴訟方ては、寺社領と唱村内大小之寺社夫々畑地備置、小作人有之、右小作浮徳金年々寺社修復料に名主手許え積金ニいたし置、右金ヲ以修復いたし候古例仕来之処、兵右衛門儀近來寺社修復有之節は氏子一統え入用割懸取立前文年来之積金同人私欲いたし罷在候。御吟味被成下度段訴上。

年貢とりたて方不正問題

相手方答弁

諸帳面を見せないこと

コレラ急夫食不正問題(安政六年)

政六年)

相手方答弁

病災危難遭れの職奉納

番人小屋焼失事件

題

寺社小作浮徳金不正使用間

一、相手方にては、寺社領修復備畑地小作金之儀、年々名主手元へ預り置、大小

相手方答弁

之寺社修復いたし候仕来にて、去ル廿五ヶ年以前、戌年大猿橋鎮守山王権現宮  
再建仕、其外当宿内拾式社之分、年々右金ヲ以大小破修復仕居候儀、尤氏神本  
社修復之節は入用高、氏子一統へ割賦取立いたし候仕来ニ有之候処、何等之子  
細ヲ以年来之横金兵右衛門私欲罷在候趣申立候哉、余り不都合之申口ニ有之、  
素より名主手許へ預り置入用可遣私極意之金子、兵右衛門手許へ預り有之候由、  
私欲との申分難得其意、此段御吟味奉願上候。尤役儀交代之節は手許過不足取  
調役へ引渡候仕来に御座候旨答上。

氏神本社修復は氏子へ割賦

一、訴訟方にては当村外四ヶ村組合御普請所堰之儀、惣高合千三百石余え定式金

五ヶ堰費用高割り問題

三拾両割合出金いたし、小破之節は自普請いたし、大破之節は御普請願上入用  
御下金え右定式出金分を合し、不足仕候節は前文五ヶ村惣高え割付出金いたし  
候仕来に有之、然ル処四ヶ年以前未年中大風雨出水にて右堰流失いたし御普請  
被仰付候砌、前文之通足金割付、兵右衛門へ触当通出金仕、其後組合村々承合  
候処、当村之儀は出金余分ニ付不審ニ存候処、尚去酉年同御普請入用之儀同様  
出錢いたし候処、同節は別て外村々へ割合余分之取立ニ相成居、前申上候通五  
箇村一躰之高割、右体甲乙可有筋無之処当村分ニ限り右前条余斗之取立いたし、  
加之渡先えは陸々不相渡私欲罷在何共疑鋪、此段御吟味上被成下度段申立。

相手方答弁

一、相手方にては、五ヶ村組合御普請所堰之儀、三拾ヶ年以前迄は定式金三拾兩  
組合村々惣高割ニいたし、小破之節自普請、大破之節ハ御普請願上候仕来ニ相  
違無之候得共、其後右御普請所模様替相成、當時は小破之節は自普請懸り高を  
以組合村々高割ニいたし、大破之節は御普請願上御入用御下金にて、不足之分  
は是亦前同様割合取極ニ有之、然ル処去ル四ヶ年以前未年中右堰流失御普請足  
金之儀組合外四ヶ村振合、当村分ハ余斗取立、尚去酉年逆も同様取斗私欲罷  
在候旨申立候得共、当村之儀は御普請井地流末にて、御場所井倉村九鬼大口迄  
之道法も手違、水揚人足時々往返之儀も手近村方之振合は人足数等相増候得  
は外村方割合とは甲乙有之候て正然之儀と奉存候。且御普請仕立方之儀は近来  
花咲村下組井上武右衛門義年々世話方ニ相頼人足遣私等之儀は同人相弁居候儀  
ニ付、御糺被成下候ハ、顧然可相分、猶亦渡先えは陸々不相渡世杯種々悪意申  
立候得共、仮令少々渡不足之分有之候共其ものへ兵右衛門相對之儀にて、聊村  
方難儀ニ可拘筋無之、然ヲ私欲との申立難心得、此段御吟味奉願上度段答上。  
一、訴訟方にては当宿御伝馬勤兼候もの共々考人ニ付壹ヶ年三分ツツ勤料として  
指出来、右之分は正人馬相勤候もの共々可割渡之処無其儀、兵右衛門問屋勤役  
中式拾九ヶ年分手元え取込私欲罷在、既に当正月中兵右衛門へ逆訴仕候一件御  
調之上濟方之砌差向去酉壹ヶ年分割渡相成候得共、其前廿八ヶ年分今以取込罷  
在候間、不残出金割賦割仕候様被仰付度段訴上。

伝馬勤錢不正使用問題（文

久二年—一八六一年）

一、相手方にては、御伝馬金動残之分村内一向相談之上兵右衛門手許へ相預り置

相手方答弁

候儀は相違無之、右は去ル廿八ヶ年以前未年中当宿年寄安太郎儀其以前江戸表  
へ罷出居、御納戸御用相勤、其節同人儀当宿方え御納戸御反物取扱御用所傍示  
杭相立度段奉願上、右ニ付其筋は宿方故障有無御糺有之、右は傍示杭相立候て  
は難渡之旨宿方惣代并宿役人共々奉願上候ても御聞濟不相成ニ付、無余儀石和  
御役所又は江戸御奉行所等へ度々歎願ニ罷出、式ヶ年之間宿方惣代并村役人共

御納戸御用

等所々宿諾罷在漸御歎願之趣意相立一件落着は仕候得共、右用向九金四拾兩余  
兵右衛門手許一手立替ニ相成居候処、右入用村方の一時出金難渋之旨にて、前

勤錢を立替分にくみられる

書余分勤御伝馬請渡殘金之分ヲ以追々請取只候様申之、任其意取斗来候儀ニ  
て、尤右之内にて去ル天保九戌年当宿前後之傍示杭相立、右入金六兩余遣払  
其余は兵右衛門手元ニ有之候得共、同人手元立替之分見え見競候ては未タ引足候  
儀無之、乍併訴訟人共疑惑有之候ては不宣候間年々差引殘之分取調為見届度段  
答上。

中馬口錢不正使用問題

一、訴訟方にては、中馬と唱信甲駿三州の武相両國の附通候馬役口錢之儀請負人  
有之、右請負金問屋方の請取宿入用ニ遣払、余之分は小前一統の断之上遣ひ道  
相立、右不足之節へ軒別の割附取立候仕来、且又隣宿村々馬士共当郡産物或ハ  
米穀塩其外宿内附通り候馬荷の分、地馬口錢と唱此分は給分なして問屋方の請  
取来、然ル所兵右衛門勤役以来中馬荷之内の勝手ニ地馬之趣申名付、自分の取  
込候ニ付追々中馬口錢減少いたし、右請負高減し候間宿用雜費の引足不申右不  
足の分年々取立候分不少、小前難渋仕、殊ニ右口錢之儀先年ハ老足ニ付八文ツ  
ツの之処、廿ヶ年以來式文増拾文ツツ請取来、猶更近年馬荷出旁先年のハ多分ニ  
相成、依ては取上り高格別ニ可相増の之、右様問屋手元の取込候分多く相成候  
故、却て減少仕候儀、眼前非分の取斗御賢察御吟味被成下度段訴上。

地馬口錢

中馬口錢は十文

一、相手方答上候は、中馬口錢之儀は年々入札を以請負人取極、右の分宿入用并  
馬差給等の引当、不足の分ハ小前一統の割賦取立候仕来有之、口錢之儀は中馬  
地馬差別ニ不拘附送荷品ニ寄口錢請取来、此儀は当宿ニ限候儀ニ無之、拾六ヶ  
宿一体の之儀にて外宿内御糺被成下候ても顯然相分候儀、聊非分の取斗仕候儀無  
御座、此段御賢察奉願上段答上。

相手方答弁

一、訴訟方申立候は、去ル天保十二丑年御年貢立替金ニ名付、郡中身元のものの不納村  
り金子借請自用ニ遣払候段達御聴、於 御奉行所御吟味之上御答被仰付候一件  
諸入用九金三拾兩余、弘化二巳年中小前一統の高割出金可致旨談有之ニ付、右  
は兵右衛門自用ニ借請候不正御吟味相成候儀にて、村方において出金可致筋無  
之、銘々難渋申の之候処、権威押付の取斗を以強て取立候。飽迄不当の仕成御吟  
味被成下度段訴上。

天保十二（一八四一）年御年

貢立替金問題

一、相手方答上候は、去ル天保十二丑年御年貢立替金、郡中身元のものの不納村

相手方答弁

村ニおいて然ル処、訴訟人共申立候通如何ニ風聞入御聴、右立替金借請候当郡  
村々 御奉行所御召出御吟味御座候処、当村の之儀は全小前方御年貢不納人有之、  
右立替金借請罷在候ニ付、其段奉申上候処追御吟味之上全小前不納有之ニ付御  
差構無の段被仰渡婦村被仰付候得共、右一件宿諾中諸入用の之儀は金四拾兩余相  
懸り、右入用未進人而已の割賦取立候ては難渋ニ付、村方一同相談之上小前一  
統の割賦取立いたし候儀ニ相違無之。然ル処兵右衛門自用ニ借請候儀ニ候得共  
前書四拾兩余の諸入用如何様権威押付の取斗いたし候ても小前一統とて出金可  
致筋有の間鋪、此段御賢慮奉願上度答上。

兵右衛門に対する非難

一、訴訟方にては前書箇条ヲ以奉申上候通にて、一昧兵右衛門儀、生質奸智恣情  
深く驕慢増いたし、其上剛氣甚數私欲不正は勿論、平日非分押付の所置逸々  
難算尽、同人勤役中御年貢割賦其外部で諸帳面類見届申出候ても相手のもの共

馴合一同ニ彼是申為見届候儀無之、就中兵右衛門儀及再応候得共役権弁舌ヲ以申威、夫錢書上帳等強談を以印形為致、殊更貯穀并百日夫食田穀取斗等何共疑敷、此上兵右衛門兄弟馴合不当相募捨置候得は一村興廃ニ拘り、終ニは可及退転外無御座敷ケ敷実々難決ニ迫リ無余儀御訴訟奉申上候何卒格別之以御慈悲相手之ものを召出前頭之始末御賢慮被成下逸々御吟味之上兵右衛門勤役中諸勤定見届被仰付銘々安堵御百姓永統相成候様被仰付度段訴上。

兵右衛門の反論

一、相手方にては前書ヶ条之外、兵右衛門奸智慾情深く驕慢剛氣甚敷非分押領之所置逸々難算尽、組頭九左衛門と兄弟合にて万事馴合、貯穀等百日夫食田穀取斗向等疑敷捨置候ハハ一村興廃拘り終ニは可及退転外無御座杯事大造ニ書綴リ奉出訴以之外之儀、貯穀百日夫食之儀は年々右穀御見分御封印請大切ニ相守居候儀は当村而已ニ限らず郡中一樣之趣意ニ有之、然ルヲ不容易支共書綴り被及出訴、兵右衛門身分ニ取取瑾ニ相成、実々難忍既ニ願人之内七郎右衛門儀は勤役中天保九戌ノ去酉迄廿六ヶ年間年貢未進之分金拾八兩三分錢貳百八拾文不納罷在、且差添人半右衛門儀も天保九戌ノ申迄廿三ヶ年之間御年貢未進之分金六兩七分零朱ト錢貳百八拾貳文有之、右は御年貢筋可等閑置ニ無之候得共、平日間柄之もの故困窮ヲ勞、兵右衛門儀難決ながら不納度々立替上納仕置候次第ニ御座候処、恩儀忘却不当至極難捨置候間、右当人とも年来御年貢未進之始末御吟味之上早々納方仕候様被仰聞度奉願上候。全体訴訟人共品々惡謀取巧村方惑亂為致候処、彼等自儘之取斗不相成故、今般不容易非難申懸候得共、兵右衛門において毛頭私欲不正之儀無御座候間、前条之趣意御賢慮之上御嚴重御吟味被成下一村平穩ニ相治候様被仰付度段答上。

右一件御調中之処、左之名前之もの立入御猶予奉願上双方篤と承札候処、願人申立候大猿橋懸替并高札場建替及田畑損地御引方水難又は急夫食御貸下金中馬口錢其外口々之儀悉ク相混候故、自然前後之取斗も有之、疑念ヲ生し論立斯年来差違候次第ニ至候得共、今般立入人立会実意ニ取調及決算、不正之筋ハ無之段事柄相分、夫錢之内論中内渡取斗置候分は此度取引相済、其余論外之諸勘定向は追々遂実談決算いたし候積、且兵右衛門儀論中旁數年来引統役儀相勤居候儀ニ付問屋名主両役共今般退役、就てハ組頭百姓代とも一同退役いたし後役差定之儀は本村枝郷ニ不拘一村一体之入札とて、名主問屋之兩役并組頭寄人は本村之内、組頭或人は小倉幡野兩組え者人ツツ至当之人撰ラ差定、以来旧弊改革一村和睦いたし候等を以一同無申分熟談内済行届、偏ニ御威光と難有仕合ニ奉存候間何卒以御仁徳御調是迄にて御免一件御下ヶ被成下度、然ル上は右一件に付重て双方御願筋無御座候。依之双方立入人一同連印御下ヶ奉願上候以上。

当御庁下

都留郡猿橋村

年寄

式拾四人惣代

小前

明治四年十二月

年寄

名主・問屋退役

組頭・百姓代退役

一村一体の入札制度

猿橋村年寄

訴訟人 奈良七郎左衛門④

年寄

東五郎病死ニ付

年寄

同 花田三郎

小倉組

小倉組年寄

年寄

三拾人惣代

小前

年寄

同 小宮山義右衛門④

同

小宮山義兵衛④

幡野組

幡野組

年寄

拾九人惣代

小前

年寄

同 千見宗八④

年寄

同 定兵衛病死ニ付

同 千見与惣兵衛④

名主

相手 幡野兵右衛門④

組頭

相手 大野九左衛門④

百姓代

同 奈良吉右衛門④

小倉村

小倉村組頭(相手)

組頭

同 高木宗右衛門④

上谷村

上谷村名主(立入人)

名主

立入人 斉藤幸平④

玉川村

玉川村名主(同右)

名主

同 牛田八郎

下吉田村

下吉田村組頭(同右)

組頭

同 渡辺太四郎④

夏狩村

年寄

同

志村三平◎

郷宿

原 正作

小沢啓太郎

夏狩村年寄 (同右)

郷宿

谷村

御役所



明治五年猿橋村一件入用割合自得連印帳

一、不正出入一件入用懸り高総計

一、金千三百拾壹兩貳朱錢貳百八文

此割合

一、金七百八拾六兩貳分三朱 宿方出金之積

一、金三百四拾四兩貳分貳朱錢五百文

枝郷小倉組出金之積

一、金貳百九兩三分錢三百六拾三文

同断幡野組出金之積

一、右は去ル文久二戌年より明治四未年迄不正出入一件、

入用総掛り高書面之通割合出金可仕等今般右定候。

金子相違無之候。依之承知印形仕候以上

都留郡猿橋村

出入一件惣代

明治五年壬申九月 奈良七郎左衛門

右同断

花田与三郎

同断

奈良賀藏

同断

奈良甚右衛門印

同断

鈴木亦一郎

同断

森川伝藏

同断

矢桐小八

小倉組

出入一件惣代

小宮山義左衛門

小宮山義兵衛

杉本治右衛門

幡野組

出入一件惣代

千見宗八

同断

千見久四郎

八（猿橋町幡野）

この史料は、史料番号二四二であつて来たところの、文久二（一八六〇）年から明治四（一八七二）年という、まる十年にわたって争われた猿橋宿伝馬をめぐる大争議が終った段階での、支出総計とその割りつけ方に関するものである。総計千三百十二兩という巨額な費用をかけて争わなければならないほど、この問題は宿と助郷村にとって重大な問題であつた。

猿橋村出入一件惣代

小倉組出入一件惣代

幡野組出入一件惣代

同断

千見与惣兵衛印

同断

幡野久兵衛印

前書之通我等立会割賦いたし候処相違無之候已上。

上谷村

原 正作印

原は郷宿の人間